武田麟太郎全集

第一巻

武田麟太郎全集

第一巻

新潮社

© *Fumiaki Takeda 1977*
Printed in Japan

武田麟太郎全集　第一巻

昭和五十二年十一月十五日印刷
昭和五十二年十一月二十日発行
セット定価九五〇〇円

著者　武田麟太郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一、電話東京　業務・二六六—五一一一、編集・二六六—五四一一、郵便番号一六二、振替東京四—八〇八
印刷所　塚田印刷株式会社
製本所　神田加藤製本

（乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

武田麟太郎全集 第一巻 目次

兇器　七
暴力　一六
檻　四三
連絡する船　五〇
反逆の呂律　五五
休む軌道　六一
色彩　七三
荒っぽい村　八八
蓑と笠　九六
ある除夜　一一三
浪漫的　一二七
低迷　一三五
日本三文オペラ　一四一
「栄え行く道」の一例　一五九

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

市井事　第一篇　一七〇
市井事　第二篇　一七三
市井事　第三篇　一八〇
ダンス　二〇〇
うどん　二〇四
消費　二〇三
苛める　二〇八
黴の花　二五五
いきおい　二六九
奇麗　二七九
変化　二八七
女の環境　二九六
葉桜　三〇一
近所合壁　三〇六

下谷龍泉寺　三三三
空想の父　三四五
一の酉　三五八
初恋い　三七三
おきよ　三八〇

《第一巻収録作品初出一覧》　三八九

編纂／和田芳恵・薬師寺章明

武田麟太郎全集　第一巻

兇器

——一九二八年、秋から冬へ

1

人々は寒げだった。しかし、何かしらに昂奮したかった。この不景気を打ち破る方法は？　と云った顔をしていた。だから、子供も妻もつれて活動だ、すき鍋だ、少しばかりの酒だ、そして花電車でも見ることだ。——浅草の店先きの、風に揺れる色旗も提燈も、町かどの杉で作った祝塔も、——小商人（こあきんど）たちが、何とかして、この不景気から逃れたいの気持が、しっかりとこめられてあるのを忘れてはならなかった。

混雑の中に、人々は花電車のやって来るのを待っていた。だが、なかなか来なかった。

橋があって、河はあいかわらず鈍く流れていた。古い巡航船が走った。ビール会社の影はいやに大きく見えた。その向うが江東地方だ。空は黒い。唯一つの広告燈だけが、空に向って、突立っている。遠くの方には、白い煙が流れていた。それはまるで汚い臭いものでも立ち登っているように見えた。

待っていた花電車は来た。人々はもっと愉快になりたがった。だが、それらは何の変りもなく、五六台立ち並んでやって来ただけだ。こしらえ人形の古い姿は、少しく滑稽であっただけだ。そして、彼らの前をゆるゆるすぎると、鈍い河は渡らずに、すぐに南へと折れて了った。あちら——労働者と、バラックと、煙突と、悪臭ある溝と、泥濘と、子供と売春婦と、反抗と、衝突と、サアベルで丁寧に剝ぎとられた電柱の×××のポスタアと、それらを含んだ街を避けるように。

三人の酔払いが突然、万歳！　と叫んだ。これは何の反響もひき起さなかった。そして人々の列はくずれ、また、もとのように、寒げに、その子や妻の手をひいて歩き出した。

2

主任は彼の椅子に腰かけて、胯火をしながら、手下たち

は、立ちはだかったまま、警察医の診断を待っていた。午後四時頃の、ポツンと点いた電燈が、としとった、だが血色のいい、警察医の頭の上にあった。彼はなかなか骨が折れた。当の患者が静かにしなかったからだ。彼の手に持たれた反射鏡が当惑したように振り廻わされて、キラキラした。患者の山本はあばれていた。

「さあ、もとの眼にして返えせ。さあ、もとの眼にして返せ！」

猫のように白くキラキラした瞳を見張りながら、山本は呶鳴りたてた。もう三十五にもなった、身体の大きな彼が、このように、子供のように、喚いたり、地団駄ふんでいる有様は、もし誰かが、突然この部屋にはいって来たならば少し滑稽に感じたにちがいない。そして、彼はきっと笑い出すだろう。だが、ここに立ち列んだスパイたちは、少しばかり顔をしかめていた。困ったな、と云う表情をしている。三重や大阪の同僚たちが、山本のように逞しい×××××××××××が、あの地方の大衆の憤激をバクハツさせ、ブルジョア新聞さえも、その報導をしなければならなくなっているのを、彼らは期せずして、思い出していたからだ。

「どうも、これは」

警察医は眼鏡ごしに、主任に訴えるように見た。主任はつまみ食いしていた塩豆を手離して、手下たちに「おい」と相図して、自分も立ちあがった。

「まあ、きみ、そうあばれても仕方がないじゃないか。まあ、医者に見せることだけは、見せたまえ。」

「さあ、×××××××××！」

四方からのびた手が彼を押えつけた。彼はそれでもまだ亀のように手足をばたばたさせた。——医者はやっとのことで、その眼の診断を終ることができた。

「こいつは」ひどい——と云いかけたが、すぐに、自分が警察医であることを思い出した。で、あらためて云った。

「こいつは、なあに、×××××××大きくなっただけですよ。」

山本は再び豚箱へほうりこまれた。そして、スパイたちは、医者を中心にして、頭を寄せた。

「ひどい白内障です。」

スパイたちは黙ったまま顔を見あわせた。すぐ出した方がいいだろう。そうでなければこちらの手落ちになるぞ、とお互いの眼は語りながら。

翌朝早く、女房のお清が呼び出された。連れて帰るためだ。彼女はいつものように、和服の上に、黄色いレーンコオトを着て、眉をしかめながらやって来た。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

「××××そちらで出してくれるんでしょうね。」
主任はよほど、この眼ばかり光った女を殴りつけてやろうか、と思った。だが、この場合、それは損になるだろう。
「別に伝染病じゃなし、こちらに責任はないのだ。不運だとあきらめてくれ。」
「あきらめても、××××××××は同じですよ。」
「××××ないさ。」
それきりだった。お清は、
「山本をうけとって帰れません。連れて行った時と××××××下さい。」と云ってきかなかった。
だが、とうとう、この手こずらせの夫婦は、白神と云うスパイに附き添われて帰ることになった。小さい、しかし、口もとには愛嬌のあるひげをのばしたこのスパイは「××と相談して、×××××××、これだけ貰いました。」と云って、お清に××××××握らせた。
途中で、彼は
「山本さん、眼に病気してよかったですよ。あとの人たちは、今年中はちとムズカシイですよ。」と、つい口を辷らせた。
「莫迦野郎。出さなくたって、外にはうようよ代りがいて、働いているんだ。」
山本は元気にどなった。しかし、彼はそれが少し虚勢があったことを、寂しく思った。ほんの少しの手ちがいから、××を口実にした拘留の網にうまうまと、ひっかかった同志たちのことを思うと。
その時、突然、頭の上で、唸り声がした。プロペラの音だ。それが迫って来た。三人は思わず、頭をあげた。しかし、山本の眼にはいって来たのは、少しくキラキラと眩しい、薄い光線だけだった。それが、ムズ掻ゆさを、瞳に与えた。
「飛行機だな。」
子供たちは、わいわいと騒いでいた。土砂を運んでいた朝鮮人たちも、お神さんたちも驚いたような顔で、ひとかたまりになって、空を見あげていた。渡り鳥のような飛行機の群れは、何故とはなしに、彼らを恐怖させた。
「百台だあ！」
子供たちは叫んだ。
「百十台だあ。」
「百二十台だあ。」
「百三十台だあ！」
山本は唸りだした。
「××××。××、×××××××××！」
「観兵式なんです。」とスパイは教えた。

「×××。×××××××」

山本の家では、小さな鋲打出機が、庭の片隅に錆びていた。彼はそれによって、一日に二千の鋲を作ることができた。だがそんな古くさい手工業が、どうして大きな鋲会社と競争できよう。会社では一台の自動機で、一時間に二千個を打出すことができたから。

彼はこちらの地域班の責任者であったが、純粋の労働者でないことを、いつも口惜しがっていた。何かの本で、近代労働者だけが、唯一の、×××××××××××、云うことを読んだことがあった。彼は、そりゃそれにちがいない、だが、なんでえ、俺のような手工業者だって、負けてはいないんだから、と単純に、残念がった。

こんどの眼のことも、実は彼一流の無雑作からすてておいたため、こんなになったのだと、云ってよかった。大分前から、眼の白い星が大きくなって来ていた。夜更けて、相談に寄って来た仲間の顔が、ふと見分けられずに、名前をまちがえたりして、笑われたことが、二三度もあった。

「お治しよ。」とお清はうるさい程云った。彼をすすめ、労働者の診療所へ行かせようとした。だが、彼は、

「時間が惜しいや。」と云って、動かなかった。本当に、そんな時間もない日が多かったのだ。

「労働者の道を照らす星が大きくなるんだ。」なぞと威張っていた。学生あがりの吉田は、くせの強い声で、

「洒落(しゃれ)を云っている場合ではないよ。眼の病気は本当に恐ろしいんだから。」と忠告したことがあった。だが、ダメだったのだ。

家の中は、いつかスパイの一人が「きれいですね」と感心した程、張りめぐらされたポスタアが、家宅ソーサクの時に、引き破られたままになっていた。白神は少しくおしゃべりをしてから帰って行った。お清は疲れた山本のために床をのべた。そして、あたりを暫くうかがってから、彼の耳の側で何かを囁きだした。

3

私娼窟ももうすっかり眠って了った。ほんの時々、遠くから帰って来る夜店商人が寂しそうに、車をひいて通った。三時が近い。星だけが見ている。暗い。その時、N工場(こうば)の裏門が静かに開かれた。そして五台ばかりのトラックが、爆音を立てながら走り出て来た。黒い群れの人影がそれを守っている。彼らはこの地方の憲兵隊からやって来た私服たちであった。

毎夜、秘密に作られ、秘密に運び去られる、これらの所謂「部分品」が何であるかは、職工たちはうすうす感づいていた。以前からあらゆる組合の手がのびないように堅めていた、この工場の警備は、この「部分品」の製作にとりかゝって以来、一層きびしくなった。永い間、この会社につとめて、今は犬のように従順に馴らされた、年とった職工たちだけが選ばれて、この「残業」をやらされていた。残業手当も、いつもよりは倍ほど分のよい、四割増しであった。

彼ら、老職工たちも、こんな軍需品の急激な製作が、こだけではないことを知っていた。B化学工場では「毒ガス」が、こっそり作られていることも、洩れきいていた。そして、役場の方からしきりに青年の状態を調べていることや、東京市中を埋めているカーキ色の洋服、また新聞の支那との交渉が決裂しそうだとの記事に逢うと、胸に刃物をあてがわれたようにドキリとするのであった。

4

山本は久しぶりに身体を休ませたので、すっかり退屈して了った。機械も動かさずにいると、錆びついて了うものだ。彼は朝のうちに、隣りの子供に手をひかれて、診療所へ通った。それから、あとの一日が永かった。本を読んでくれるものでもあればよかった。だが、お清も忙しかった。近頃の彼女はまるで男のように思われた。髪は無雑作にひきつめていた。そして、れいのレーンコオトに長靴をはいて出て、夜晩くまで、帰っては来なかった。

その間、山本は独りで部屋の中で色んなことを考え、又、一人で憤慨していた。留置場にいる同志のこと。一日に三度、××××××××××××××××××人のこと。それから、今朝、診療所の待合室で、足首を焼き爛らして、跛になりかけている鋳物工から聞いた診療所おやじの二人の妾のこと。又、学校の火事で、このおめでたい時に不謹慎な、と罰金二百円を云い渡されて、払えずに娘を売った小使のこと。それらが、彼の頭の中に行ったり来たりした。

――誰かがはいって来た。スパイの白神かと思ったので、「犬か。」とどなった。

「電気もつけずに、何をしているのだ。」と客は答えた。それは、学生あがりの吉田の声だ。山本はほっとして嬉しくなった。

「う、来たか。」と何故か小さい声しか出なかった。

スイッチをパチンと捻る音がする。

「眼をすっかりやられてな。」

「そうか、だから云わないことではなかったのだ。」と吉田は静かに云った。そして、山本の黒眼鏡を外して、その開かれた眼の前で、掌を二三度動かして見せた。

「見えないのか。」——

だが、吉田は、それにばかり拘泥してはいられなかった。彼は彼の用事を、せっせと始めた。山本は、その横で、吉田の姿を思い浮べながら、独りで微笑していた。けれども、その姿は、今の吉田のとは大へんちがっていた。何故なら、今日の吉田は、きれいに髪を刈り込み、いつものびていたひげは剃られ、しかも折目正しい新しい洋服を着て、口にはマスクをかけていたから。もし、山本の眼が自由であったら、彼は吉田だとは思わなかったにちがいなかった。

暫くの沈黙の後、とうとう山本は口をきった。

「どうした。」

その意味は、近頃彼のことが、新聞に、退営と入営を期として、××××「××××××××××」×××しようとした一団の中心人物として書かれてあったことについてであった。彼の関係している、戦争××同盟についてであった。

「しごとは進んでいる。段々大衆的になって来た。」

そして、一通り吉田は彼の用事をすませた。そして空腹を訴えはじめた。

「もうお清が帰って来るだろう。」

だが、吉田は飯櫃を勝手にさがし出して来た。そしてガツガツ食い始めた。食いながら彼は山本に、労働者街で、労働者によって作られた×××、×××××××××××××××いることについて、詳しく語った。

「こう、逆手に握って迫って来やがったんだな。」と山本は自分の言葉に感心しながら云った。

「そうだ、それを奪い返すことが問題なのだ。」

5

おしのが東京へ来たのは、この夏であった。彼女は、それまで福島県の山と山の間の傾斜地で百姓をしていた。小さな黒い父親と同じ程、彼女の筋肉も骨体も、かたかった。

彼女は都会から来た人買いに売られた。村の多くの娘たちと同じように。父はだまりこくったまま、百二十円を受け取って、先方の書いて来た証書に大きな実印を押した。おしのは、父が大金持になったのと、自分が東京に行けるので、すっかり浮々した気持ちになった。唯、出発の時、すぐ次の弟の健太郎が泣きだしたので、彼女も少し悲しくなり、弟を抱いてやった。

それから汽車に乗った。汽車に乗ってから、彼女は心配になった。で、人買いにくりかえし、くりかえしたずねた。

「めしや（飯屋）だね、めいしや（銘酒屋）じゃねえんだね。」

それは彼女の奉公先きについてであった。彼女は、多くの村の娘が、飯屋に売られたつもりだったのに、銘酒屋の女にならねばならなかったのを思い出したのだ。都会の人買いは、こうまぎらわしく云って、娘をつれて行く慣しだったから。

「めしやだあね、めいしやじゃねえんだね。」

人買いはとうとう憤慨した。

「うるさいやい！　てめえのようなお多福を銘酒屋へ売りこめるかい！」

そして、東京についた晩、彼女は本当に安心した。行きついた家には、大きな飯を食う場所もあったし、五升も一度にたけそうな大釜が三つもあったから。そして、彼女の先輩たちの間に、小さくなって、寝ぐるしい一夜をあかした。

それから蚊の多い夏が来た。そして蚊がまだ、台所の隅で、太った女たちの腕に食いつくのをやめなかったうちに、冬が来ていた。

山にいた時とは、すっかり生活がちがっていた。それが、何よりも苦痛であった。眠いのだ。朝は二時半に、いぎたない同輩たちと一緒に、枕もとの眼ざまし時計に叩き起された。それから、白米の山だ。一日に一石五斗の米を洗った。手はしびれる。朝飯の用意がすむと、六時半頃から八時半まで、敷きっ放なしの蒲団の中へもぐりこんで、ぐっすり何も彼も忘れて、眠った。

冬が来てから、おしのは恋愛をした。彼女は、毎日きまって十五銭の昼めしを食いに来る青年のことを思いだしたのだ。彼を見ると何故か青々とした木が思い出されるのであった。彼女は十七歳である。青年のことを平気で、他の飯たきにしゃべった。すると、ひやかされた。だが、本当に彼と結婚できるように思えてならなかった。

ある夜、寒さが身にしみて来たので、彼のために、首巻きを作ってやろうと決心した。しかし、その時間もなかったし、肝腎なことには、編み方なぞはちっとも知らなかった。で、家から持って来た「胴巻き」の中から五十銭を持ち出して、露店へ買いに出かけた。しかし、首巻きは高かった。少し考えた後、手袋にした。そして、それを枕もとに置いてあしたあの人に渡せますようにと、祈りながら寝た。

6

N工場で、職工を三十名募集した。吉田はこの中へはいりこもうと思った。応募した。

朝の五時に、受付けはもう百五十人を突破していた。守衛たちはこの混雑にまぎれて、組合のビラなぞを工場の中へ持ちこみはしまいかと、行ったり来たりして、警戒していた。七時半に締切られた。応募人員数はそれでも五時からは余り増してはいなかった。二百十七人である。

午後二時頃に、吉田は「試験」された。最初は体格検査があった。これは余り問題にならなかった。身体には自信があったから。

次に係りの者が彼に色んなことをきいた。履歴。

「すると、今まで、長野県にいたんだね。いつ頃上京した。」

「前月の二十日です。」と吉田は嘘をついた。何故なら、ここでは永く東京にいたものは採用しなかったからだ。永く東京にいることは、危険思想にかぶれることを意味していた。

突然係りのものは質問した。

「イギリスの首府は？」

「ロンドン。」

吉田は反射的にすぐそう答えて、しまった、と思った。ここでは、イギリスの首府なぞは知らない、知っていてもすぐテキパキと答えることができないのを選び出すからだ。鈍重なものを職工に使うことは、政府から特秘な御用を申付けられる工場のために悦ばしいからだ。

――何れ採用か否かは通知する、と云う言葉をきいて、吉田は、わざとぽかんとさせた顔を、二度も三度もさげて「試験室」から出た。すると、空腹が急に意識されて来た。昼めしを食ってはいなかった。

ぶらぶら歩いて行くと、行きつけの飯屋では、もう夜の「定食」を出してくれた。自由労働者が四五人一ところでしゃべりながら煮魚をうまそうに食っていた。

終って表へ出ると、風が烈しくなっていた。そしてどっと砂が顔に吹きつけられた。口の中までジャリジャリした。と、うしろから追いかけて来る女の声があった。ふりむくと四角な肩をした、みにくい女だ。おしのである。

「待っておくれよ。これあげよと思って、買ったんだから――ひる待ってたに――」

そして、あっけにとられた吉田に白紙に包んだ手袋を渡して、さっさと駆けもどった。白紙には「あんたへ、おしの」と書いてあった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo